

大学生活で得られたもの

経営情報学部4年 味蓼 恵月

大学4年生が間もなく終了しようとしている今、一番思うことは「感謝」です。

「大学生」は、人それぞれ捉え方が異なると思います。その辺の大学生の一人、多摩大学の学生の一人、そのように考える人もいるでしょう。しかし、個々人が「私」であってほしいと思います。毎日決められた時間に間に合うように大学へ向かって、ただただ時間が過ぎていくのは、このように文字に起こせば何の面白みもありません。もっと自分らしく生きてみたらきっと楽しくなります。まだ学生生活が残っている後輩たちには、色々なことに挑戦し、気づきを得てほしいと思います。

人参は美味しくはないはずなのに、美容のためにと食べられるようになり、スポーツが苦手な体育が一番嫌いでしたが、長距離走だけは得意でした。本を読むことは苦手ですが、ゼミで扱う内容は何度も読んで理解しようとしてしまし、難しい問題を解くのはすぐにおしまいにしたいのに、人に教えることは好きでした。自分の避けていたものの中に、好きなものがあるのかもしれないとよく分かりました。挑戦してみたり、ほんの少しだけ前に進んでみたりするだけで、新しい自分が見えてくるとたくさんの人に知ってもらいたいと思います。

私は絵を描くことが小さい頃から好きでした。はっきり言って得意です。正直今まで出会った人と比べても、そこそこうまい方だと思っていたし、自信もありました。最近は時間のある時に好きなように絵を描くことにハマっています。SNSで絵を投稿するようにもなりました。でも、今までは「できる方」だったのに「まだまだ」に一瞬で変わった瞬間でした。ただ、この感覚が悔しさだけだったならきっと中途半端にしていました。“その世界”の中にいる人々を初めて見て感動しました。諦めずに、自分らしさでもっと上を目指したいと思うようになりました。「自分の好きなことが、もっと好きになるように」と、趣味だけでなく、没頭するということは“自分にしかない世界”を広げると思います。

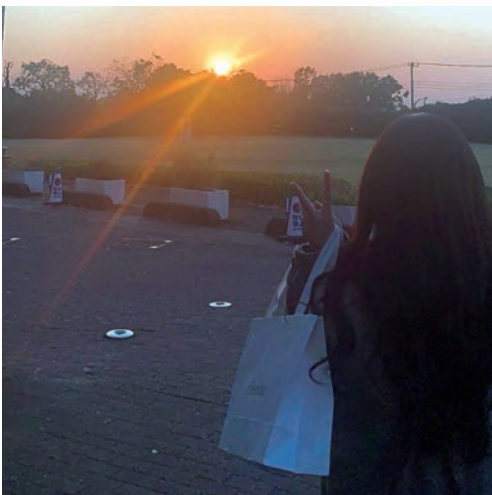
私は大学で様々なことを経験しました。それと同時に大きな悩みに

も直面しました。アルバイト、家族や就職のこと等、酷く落ち込んだこともありました。本当は悩んでいるのに、口では「もうどうでもいい」と片付けているつもりでした。それでも、手を差し伸べてくれる人たちがいました。こんな、どうしようもない私のことを支えてくれる人がいる。それはきっと、大学生活を棒に振っていたら得られなかったものだと思います。挨拶をすれば、挨拶が返ってくるように、人を思いやる気持ちはいつでも忘れてはなりません。

大学生活で考え方を大きく変えられた私が一番思うことが「感謝」です。躓いても、いつでも相談に乗ってくれる先生、それは違うと助言してくれる先輩、気晴らしにどこかへ行こうと言ってくれる友達や、元気づけてくれる後輩、皆がいなければ私はここまで成長できませんでした。それはきっと思いやりをもってしてくれたことなので、私も誰かのためになれるように努力したいと思います。技術的なことや、頭を使うこと、データに起こせたり、目に見えるものを伸ばしたりすることは、大学生活において非常に重要なことです。でも、それ以上に、多角的な視点を持つようにしたり、思いやりをもったりすることが大切だと思います。私は多摩大学の学生であるうちに学んだこの気持ちを胸に、これからも私らしく生きていこうと思います。



趣味の絵



キャンパスで見える夕陽



ゼミでの一枚

やりたいことを現実に

グローバルスタディーズ学部 4年 粟津 成洙

私が大学4年間を通して皆さんに伝えたいことは、自分がやりたいことはチャレンジするという事です。

私は長年学んできた書道の楽しさを多くの方に知っていただきたいとの思いから、書道イベント、中でも書道パフォーマンスに力を入れて1年生の頃から活動してきました。

多摩大学でも少人数で先生や職員との距離感が近いことを活かして、自分の思いを伝え、書道パフォーマンスの機会をお願いしたことがありました。

1年生の春休みの短期研修の時に、台湾の義守大学に行った時のことです。プログラムの中の1つに文化交流がありました。そこで学校に、台湾で書道パフォーマンスを披露したいという提案をしました。それまで、国内では経験がありましたが、海外では初めてでした。用具の準備から段取りについての不安や当日の緊張もありました。しかし、安田副学長をはじめとし、国際交流課のチェン主任など様々な方の協力により台湾で約10分間、音楽に合わせて書道パフォーマンスをすることができました。台湾の学生からは大きな拍手を頂き、「書道は知っていたが大きな紙に書く書道は見たことがない」、「書道に興味がわいた！やりたくなった！」などという感想もいただき、確かな手ごたえを感じるすることができました。

また寒川町での冬のひまわりライトアップイベントでは、光る書道パフォーマンスをゼロから企画提案し、実行に移すことができました。大学側はもちろんのこと、寒川町観光協会の方々にも月に渡って、相談しながら準備を進め、FM湘南ラジオでPRする機会もいただきました。リハーサルと当日は大学生と高校生のボランティアの方々にもご協力いただき、大勢の皆さんのご協力を得て成功させることができました。台湾の時とはまた違った夜のパフォーマンスを行うことで、自分の中の書道パフォーマンスに幅を持たせることができました。別の取材に来ていたタウンニュースの記者が、記事内容を書道パフォーマンスに変更して掲載いただいたというおまけまでつきました。

これらの経験は、先生や職員の皆様に近い存在である多摩大学だからこそできたと思います。皆さんもやりたいと思うことがあったら、例えばきちんとした形になっていなくても、先生や職員の方に相談して、力になっていただき、実現してみようとお勧めいたします。そこから、また新しい扉が開くと思います。残りの学生生活もこのような機会をいただけたことを感謝するとともに自分がやりたいことをチャレンジしたいと思います。それだけではなく、4年間で経験したことを活かしてより書道の魅力を国内外問わず広めていこうと思います。



義守大学での書道パフォーマンス



冬のひまわりライトアップイベント

読書

グローバルスタディーズ学部 4年 加藤 とまむ

大学4年間で作られる自分の基準は、一生続き、仕事に対する姿勢、アウトプットの質、目標に直結すると考えています。そこで大学入学前に、在学4年間で「本1000冊読む」目標を立てました。この原点を掘り下げると、大学受験の失敗があります。5年前、第1志望の大学に合格することができませんでした。志望大学合格を諦めきれなかったため、両親に再挑戦させてもらえるよう説得しました。再挑戦したけれど、限られた時間の中で適切な努力の量が足りなかったため、第1志望の大学に合格することが出来ませんでした。今でも当時の心境を鮮明に覚えています。合格できなかった悔しさを一生忘れることはないですが、正面から真剣に勝負に向き合ったため、潔く負けを認めることができました。合格した大学から「どこなら自分は勝てるのか」と真剣に考え、多摩大学に進学することを決めました。偏差値という世間体ではなく、「実用的な英語を身に付けることができる環境」が整っているため、グローバルスタディーズ学部に入學しました。入學した当初は、難関大学に進学した多くの友達と比較し、自分自身に対する劣等感を感じる事が頻りにありました。しかし、「世界で活躍する」という強い信念を持つことで、やるべき事に集中することができました。

本を1000冊読み終えたのは、大学4年生の夏前でした。毎日3時間の読書習慣と、毎月1万円分の本を購入し続けました。毎週土曜日に九段下で学長主催のインターゼミに1年生から4年生まで参加しました。毎週ゼミ開始の数時間前に、九段下近くの神保町の本屋を訪れ、多種多様な本を探しに行きました。さらに、入居している学生寮では気鋭の友達があり、本から得た知識と見出した考えを共有、深めることが楽しみの1つでした。

読書を通して気づいたことは、「勉強は贅沢」であることです。この考えを体現した具体例が、大学2年生の時に1年間シンガポールへ留学した経験です。その当時、日本とある国の国際関係が非常に険悪であり、「日本人」という理由で人種差別を受けました。シェアルームしていた自分の部屋から出ることもままならず、過度なストレス等が原因で体重が10kg落ち、病院で点滴を打つほどの状況でした。この時に読んでいた本は、移民と難民に対する人種差別の現状について書かれたものでした。本から得た知識と自分の考察は、当事者本人しか見ることができない唯一無二の景色です。自分の考えと意見を言語化し、他者と情報を共有しても、同じ景色を見ることはできません。さらには、読書は、「生きる意味」を見つける手助けをしてくれます。多様な人生経験、偉人達との対話から、何が自分の心に火をつけるのかを試行錯誤しながら、見定めることができます。本から見つけた「火種」を貰って来て、適切な方向性と量の努力を続けると「情熱」に変わります。そして、「築き上げたスキルと知識を世界と分かち合う」ことが生き甲斐に繋がります。

最後に、多くの人の理解と目に見えない協力があって、今の自分があります。感謝の気持ちを持ち続け、地道に努力と読書を楽しんでいきたいです。



神保町の本屋



切磋琢磨して高めあう友達



インターゼミでの様子